

---

## 5番目の蠅

つきもときっくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

5 番目の蠍

### 【Nコード】

N 1 5 5 7 Z

### 【作者名】

つきもときつくん

### 【あらすじ】

前世と来世が同一時間軸に混在する世界。

前世の自分が殺しに来る。来世の自分を殺さなければならない。

5人の異なる性格、性別の自分達との関係は、未来は？

## 第一章

### 第一章 岡本日和の場合

あたしにはちょっとした秘密がある。実はエスパー、超能力者なのだ。

と、言っても手を使わずに物を動かしたり、遙か遠くを見るとかはたまた空を飛べるとか、そんな凄い力ではない。

あたしの超能力はズバリ、未来の出来事がほんのちょっとわかる、未来予知なのだ。

でも、これは自分でコントロールは出来ない、突然やってくる、まるで思い出すかの様に未来が見えてくる代物。

あ、自己紹介が遅れた。あたしの名前は岡本日和<sup>おかもと ひより</sup>、今年高校に上がったばかりの一年生。カーキ色のブレザー、赤と茶のチェックのスカートの制服が可愛い青葉学園の生徒だ。

入学して一ヶ月以上が経ち、学校にもクラスにも馴染んできた。尤も、あたしみたいな要領のいい人間には馴染むのに努力を要しない。更に未来予知の力までもっている超人だからね。

五月の朝の登校時間。新緑の季節。風はまだ少し冷たいけど、天候は素晴らしい。まるで、あたしのこれから人生を暗示しているみたい。

あたしの予知が正しければ、後ろから声を掛けられる、「おはよう日和ちゃん」って。

「おはよう日和ちゃん」  
ほらね。

「おはよう、咲良」

この子は、宮原咲良<sup>みやはら さい</sup>、子供の頃からの幼馴染。長い綺麗な黒髪と物静かな口調と態度が特徴的な人だ。でも、実は怒ると怖い人、子供の頃から良く怒られた。別にあたしが悪い子だった訳ではなく、

咲良が怒りっぱいだけだ。

次は誰に話し掛けられるかな？ あたしにはわかっているけどね。

「おはよう、お二人さん」

「おはよう」

「おはよう、相変わらずいい顔してるね」

このすらりと背の高い男子は、木村悠一きむら ゆういち、金持ちのお坊ちゃんだ。

金持ちが憎い。おまけに顔もいい、礼儀も正しく紳士的な雰囲気。

でも、ずれてる。妙におかしな価値観を持った人だ。この人も子供  
の頃からの友達。

そして、この角を曲がると私達を待っている人がいる。

「おはよう、みんな」

と、明るく挨拶をしてくるのは、片平奈羽かたひら なうだ。彼女も幼い頃からの  
友達。小さくて、明るくて、優しい印象の人。つまり、可愛い容姿と可愛い言動で周囲を騙くらかして生きている人だ。本人  
にその自覚がないのも問題。更にあたしと少しキャラがかぶって面  
白くない事も多々ある。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね？ 寝不足？」

「うん、徹夜でゲームしてた」

この子は重度のゲーマーでもある。

そろそろ、あの人が後ろから慌しく走って来るはず。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

とか言つて。

この人が伊吹圭いぶき けい。特徴のない男、何を考えているかわからない、  
多分何も考えていない。アドリブだけで生きている不思議な生き物。  
待ち合わせにも遅刻する最低な人。でも、この中では一番古くから  
の友達。

「伊吹……、ぜえぜえって擬音か？」

「何か面白い表現だね」

「あんたは、もう少し余裕を持って行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

これで私の友達は全部。友達は友達でも親友かな？ 親友とも違うかも、好きとか嫌いとかでもない、気が合う、合わないでもない。一緒にいると自然、それが一番近い表現かもしれない。なぜか、五人で集まると落ち着く。誰一人欠けても駄目、五人で一人つて言う感覚。

教室ではいつも通りの日常。何気ない会話が聞こえてくる。

「まあ、事故にあってくれてよかったよ。あいつも振り向いてくれそうだ」

「おお、よかったじゃん」

「ラッキーと言えばラッキーだな」

他愛のない恋愛話や、昨日のテレビの話などに華を咲かせている。だが、あたしは知っている。一時限目のみんなの恐怖に歪む顔を。「体育館からピアノ無くなったらしいよ？」

「何それ？ 泥棒？」

騒がしい雑談の中、あたしは得意げにホームルーム前にも関わらず、日本史のテキストを広げ勉強を始める。

「岡本さん、まじめだね」

「まあね。準備万端で挑みたいから」

と、前の席の子の言葉に対応する。その子は不思議そうに私を見る。でも、教えてあげない。今更知っても遅い、一時限目は抜き打ちテストなのだ。しかも、問題は全部知っている。あたしって天才でも、答えはわからないから、調べておかないと……。

ホームルームも終わり、授業が始まり、先生が口を開く。

「中間終わったからって気を抜くなよ。という事で今日はテストをやる」

先生が「どうだ？ 予想外で驚いただろ」と、でも言いたそうな顔で話す。

ふふふ、あたしは先生の想像の遥か上に行く女よ……。今から驚

く顔が楽しみでしようがない……、ふふふ……。

あたしは、次々と問題を解いていく。調子がいい、多分満点。本当に人生楽。予知がいつ来るかわからないから不便だけど、それでも、他者より遥かにアドバンテージがある。

お昼休み、学食にダッシュ。大好物のエビカツサンドが今日に限って売り切れてしまう。急がないと。おっと、その前にやらないといけない事がある。めんどくさいから、放置しておく？ ああ、駄目、あいつはあたしのお財布なんだから。

三階の踊り場、木村悠一の姿見える。私は大声で呼び止める。間に合った……。

「ちよつとこつち来て!!」

悠一は驚いたそぶりもみせず、あたしの方に階段を登ってくる。

「どうした？」

「大好物のエビカツサンドが売り切れるのよ、大変なのよ」

「た、大変だな……。で、俺と何の関係があるんだ……？」

「お金貸して！ 売り切れちゃう！」

あたしは悠一に手を差し出す。

「嘘だろ……。あ、でも俺も結構厳しいんだ……」

「ああ、もういい、自分で買うから！ じゃあね！」

あたしは、そう言つと学食にダッシュ。

「金持つてんじゃないか」

その時、下の階でガラスの割れる音が聞こえる。私は知っている、強風か欠陥かは不明だけど、二階の踊り場の窓ガラスが落ちる。それが、丁度悠一に直撃するはずだった。

あたしはこつそりと悠一の命を救ったのだ。まっ、感謝されたくてやっている訳じゃないけどね。なんてったってあいつは、あたしのお財布なんだから、死なれると困る。

ふふふ、間に合った。大好きなあたしのエビカツサンド。エビカツサンドはあたしの血液なのよ。

テーブルはつと。目を瞑ったってわかる。そこに咲良と奈羽がい

るはず。柱の裏、そして窓際、いつもあの二人が席を取っていてくれる。これは予知でない、いつものこと。咲良と奈羽はお弁当で昼食を買いに並ぶ必要がないから速い。

咲良と奈羽が手を振る、あたしも振り返す。

「合唱部がね、正式に部活として認められたよ」

大好物のエビカツサンドを頬ばっていると、奈羽が言ってきた。そういえば、奈羽が前に言っていたような……。部活にする為に人数が必要だから力を貸してって。それが、合唱部。合唱の経験なんてないけど、奈羽があまりにも必死だったから、了承してしまっていた。

「よかったね、奈羽ちゃん。凄い頑張ってたもんね」

「うん、ありがとう」

咲良と奈羽が嬉しそうにしている。ちなみにメンバーは、この三人の他に木村悠一と伊吹圭も。つまり、いつもの五人。

「今日は色々準備あるから、正式な活動は明日からかなあ」

いきなり明日？ 心の準備が……。合唱って歌うんだよね？ 困った。それでも、楽しそうに、嬉しそうにしている奈羽を見るのは好き。乗り気ではないけど、黙っておこう。

危ない、この可愛い容姿と可愛い言動に騙されかけた……。

「いったい、いつになったら、どこでもドアが開発されるんだよ……」

意味不明な言葉を発しながら現れたのは伊吹圭だ。

「夜更かししないで、早く寝ればいいんだよ」

奈羽が笑顔で答えているけど、なに？ 会話が成立している？

「それが出来たら苦労しないよ……。今日早く寝るためには、昨日も早く寝ておかないと、眠れない。もう無理」

圭は、テーブルに座り、買ってきたラーメンをすすりながら、何やら意味不明な事を言う。

「じゃあ、明日早く眠る為に、今日は徹夜する、なんてどうでしょ

う？」

「普通に死ぬ」

一日位徹夜しても死なないよ……。その前にこの二人はいつたい何の話をしているの？

「瞬間移動でもあればいいのにね」

咲良が会話にくわる。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ」

超能力という単語にピクリと反応してしまった。良く見ると、そう言ったのはいつの間にか隣に座っていた悠一だ。

「超能力って、あつたら便利だよな。お掃除とか？」

「でも、超能力って身体に悪いらしいよ。本来、人間には無いものだから使うと負荷が凄くて寿命縮むんだって」

嘘……。あたしはこのエビカツサンドの為に寿命縮めたの！？

「寿命以前に超能力があつたら、実験とかに使われそうだな。更に嫉妬とかなんとかで命を狙われそうだ」

あたしの知らないところで、そんな話になっていたの！？

「どうした岡本？ そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか？」

不意に悠一に話し掛けられて、大きく驚いてしまった。

「え？ ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんてある訳ないよ」

やばい、不自然だったかな？ あたしが超能力者だってばれたかな？ 実験されるのは嫌だよ……。

やばい、ここは逃げよう、逃げるしかない。

「あ、あたしお先するね。職員室いかないといけないんだった。またねえ」

あたしはみんなの返事も聞かずに一目散に逃げる。実験怖いよお……。

はあ、びっくりした。あたしは教室に戻り、自分の席で一息つく。



実験は置いておいて、寿命が縮むって本当かな？ 単なる噂だよな？  
どっちよ！？

「ねえねえ。片平さんと仲いいよね？」

悩んでいる最中に話しかけられた。片平？ 奈羽の事ね。

「うん。幼馴染だよ」

「あと、なんだっけ？ いつも一緒にいる、伊吹君」

奈羽と圭がどうしたんだろう？

「うん。二人共幼馴染だよ？ それがどうしたの？」

あたしはちよつと疑問形で答える。

「伊吹君が片平さんに告白したって聞いたけど、どうなったのかなあ  
あって思ってた」

告白？ はて？

「なんの告白？」

「え？ お付き合いしてって言う……愛の？」

「ええ！？ 嘘お！？」

さっきはそんな素振りじゃなかったよ！？ いや、あったかも？  
どっちよ！？

「あ、はつきりとはわからないよ？ 噂になっっているから、本当のところはどうなのかなって。ほら、片平さん人気あるから、みんな  
気になっっているんだよ」

奈羽は男子から人気が高い。小さくて、華奢で、明るくて、可愛い、一見淒く性格も良さそう。みんな騙されている……。あの子は作ってはいないけど、それは世の中をうまく渡っていく為に身につけたスキルが癖になっただけ。本当はもっと性格が悪かった気がする、子供の頃の記憶だけ……。

その奈羽と圭がねえ……。気になる。

「気になる。あたしも聞いてみるね」

「う、うん。無理しなくていいからね」

話題を振ってきた子はどこかへと行ってしまふ。名前なんだっけ？  
はて？

でも、聞くにしても、なんて聞こう？ 放課後になってしまった。五月の下旬、日の入りは遅く、まだまだ陽は高く日差しも厳しいけど、時折吹く風が冷たい。夏は遠い。なんて考えている暇はない。校庭の外周にはイチヨウの木が数多く植えられている。その大きさ、形は不揃だ。でも、それは、生徒それぞれがお気に入り。イチヨウの木を見つけるといった楽しみを提供してくれる。あたしのお気に入りはこちら。特徴は？ と、問われると困るけれど、大きくも小さくもない、形も良くも悪くもない。特徴がない。でも、あたしには聞こえる、「私を見て」って。なんて考えている暇はない。

枯れ草が目立つ芝生。夏になると一面に真つ青な芝生が広がるのかな？ でも、今はライトブラウンの世界が広がる。時折吹く、冷たい風にサラサラと抵抗もできずに揺らされている。それは、命のない者達の残音。ああ！ なんて考えている暇はない！ 奈羽はどこいった！？

いた。奈羽は何やら色々荷物を持っている。ダンボール箱にポスターみたいなのとか。

「奈羽？ 少し持とうか？」

華奢な身体に大きな荷物。何か大変そう。

「あ、日和。大丈夫だよ。結構軽いから」

奈羽は笑顔で答えてくれる。

「ふうん……。重そうにみえるけど……。部室に持っていくの？」

「そぞ。明日楽しみにしてて。きつと素敵な合唱部になるから」

あたし達は歩きながら話す。向かう方向は旧校舎。文科系の部室が多く入る校舎。怪しい部もあり、出来れば近寄りたくない。

「ねえ……。圭とはどうなってるの……？」

あたしは思い切ってストレートに聞いてみた。

「好きだよ」

ええ！？ あたしの知らないところで世の中動いている！？

「それがどうしたの？」

奈羽の無邪気な笑顔が痛い。

「あ、うん……。あたしに口を挟む権利なんてないし……。よかつたね……」

「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」

「え？」

何の話？ 奈羽は、たまに話しが飛ぶ時がある。この子は頭がいい、あとで思えばわかるけど、想定される会話のやりとり、恐らくそんな会話になると言っただけをショートカットして行く。次の変化が来るだろうという会話まで一気に飛ぶ。集中していないと付いていけない時がある。多分これもそう。「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」、でも、どうして、この言葉に繋がるのがわからない。

「日和、ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしててね」

奈羽はそう言つと、旧校舎の中へ消えていく。

長話したつもりはないけど、随分と陽が傾き、あたしの影を長く長く伸ばす。

今日は朝から低調。奈羽と圭の事も少なからずショックだったけど、今のあたしの心を占める関心事は、ずばり「未来予知で寿命は縮むのか！？」だ。

早くも昨日の抜き打ちテストの答案が返ってきた。先生もそんなに急がなくても……。

当然に満点。驚く先生の顔もおかしかったけど、内心は複雑。

テストで百点とる為にあたしの寿命が……。結構予知来ていたけど、もしかして、あたしの寿命はもう少しなの？ どうしよう。

でも、未来予知はあたしの意思に反して突然やってくる。些細などうでもいい予知とか。その角を曲がると誰がいるとかわかってしまう。

でも、これはまだ確定事項ではない。見えない敵と戦っても仕方が無い。まだ、確定したわけじゃないんだから、気持ちを切り替え

よう！

放課後になってしまった……。あたしは薄汚れた旧校舎の前に立つ。

ここに理由はもちろん一つ。合唱部の活動初日だからだ。歌うの？ 本当に歌うの？ あたしが？ 嘘でしょ……。

とぼとぼ。今のあたしの足音を擬音にしたら、きつとそんな言葉になるだろう。

場所は事前に聞いてある、二階の端の教室。階段を登ると壁には各部の勧誘のポスターが貼ってある。

定番の部活からマイナーなものまで多彩。オオクワガタ同好会ってなによ……。いや、それはまだいい。庭部ってなに？ あたしの想像通りなら凄く楽しそうなんだけど。

きつとあれだよな？ なんか小さな箱庭とか作っているんだよね？ お家とか池とか作って、お人形とか配置して？ ……、やばい、最近現実逃避が激しいよ……。

合唱部前に到着すると、教室前には奈羽を除く三人が来ていた。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入ってきてって」

「お前はもつと余裕持って行動しろよ」

最後の言葉は伊吹圭だ。いつぞやの仕返しか？ そちもわるよのお……。

「そちもわるよのお……」

やばい、心の声が出てしまった。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

伊吹圭、古いよ。調子に乗るな。

「じゃあ、行くぜ？」

なぜか、圭が先頭切つて扉を開ける。扉は音もたてずにスーッと開く。

光が広がった。

綺麗に掃除された教室、壁には音楽のポスター。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が両手を大きく広げ嬉しそうに叫ぶ。

その、奈羽の後ろにある大きな物体に目が行く。いやでも行く。

「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」

ちよつと待ちな……。大きすぎて教室の大部分を占有しているじゃない……。グランドじゃなくてアップライトにしておきなよ……。いや、そんな事じゃなくて、強奪って何！？ 冷静になれ……。多分いつも通り、その可愛い容姿と可愛い言動で教師連中を騙くらかして運ばせたんでしょ……。

「へえ、思ったより本格的じゃん」

「ここ、景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」「どれどれ？」

咲良が窓からイチヨウの木を指差す。その前にあんた等……。ピアノへのツツコミはどうしたの？ ボケたら突っ込むのが礼儀ですよ……。

「気に入って貰えたら嬉しいなあ」

まあ、奈羽が嬉しそうにしているのは好き。ここは素直に気に入った振りをしよう。

「うん。気に入った。ピアノも、その、かっこいいね……」

なぜか、みんながあたしを見る。やばい、タイミング間違えた！

？ 何かあるの！？ 誰かお願い、あたしに空気の読み方教えて！！

「奈羽？ ピアノ弾けるの？」

「もちろんだよ」

よかった、普通に会話が進んだ。

「今日、この日の為に曲も作ってきたよ。みんなで歌いたくて……」  
そう言つと、奈羽はみんなに歌詞カードをくばる。

「じゃあ、最初は私が歌って見せるね、二回目はみんなで歌いましょう」

奈羽はピアノに座り、弾き始める。凄くゆつくりとしたポップなメロディ。そして、奈羽が、その綺麗な声で歌う。あたしは、その歌声を歌詞カードで追う。

一番目の私は猫だった、我儘気ままに生きて夢の世界、何も見え  
てはいなかった。

二番目の私は犬だった、猫さんが心配だった夢の世界、幸せは風  
の中に消えていく。

三番目の私は兎だった、何もかもが不安だった夢の世界、流れる  
ままに朽ちていく。

四番目の私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんな  
と一緒に眠りについた。

五番目の私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本  
当はみんなが好きだった。

楽しそうな曲調だけど、歌詞がなんか悲しい……。悲しいよ……。  
みんなも同じ思いなのか、凄くまじめな表情。

そして、二回目。みんなで歌う。合唱部で初めて歌う曲……。奈  
羽はどうして、こんな悲しい曲を選ぶの？ あたしはどうせ歌うな  
ら、もっと楽しい曲がいい。泣きそう……。

部活も終わり、少し憂鬱な気持ちで旧校舎を出る。風が強い。  
カーンと言う音が間近に聞こえた。

「おい、ぼつとすんな」

そう言ったのは伊吹圭だった。凄く近くにいます。足元には空き缶  
が転がる。

状況を把握するまでに時間が掛かった。

「伊吹、大丈夫か？」

「圭君、怪我は？」

「あ、大丈夫。慣れてるから」

圭が手をひらひらとさせるのを悠一、咲良が心配げに見守る。

今日、一日ついてなかった。明日は、いい日になればいいな。

今日も朝からついてない。合唱部の全員が生徒指導室に呼び出された。先生もいっぱい。かなり怒っている。

「弁解を聞こうか？」

溜息が出る。どうして、こう、高圧的なの？

奈羽が一步前へ出る。

「ありません。私共にはなんら関わりのない事柄なので」

「無い訳ないだろ。合唱部の部室に体育館から紛失したピアノがあるんだから」

「ええ。それは不思議ですね」

ピアノを盗んだのが、あたし達、合唱部だと思われる。まず、奈羽は盗んだの？

「誰がどう見ても、盗んだのはお前等しか考えられないだろ」

別の先生が声を荒げて言う。

「逆にお伺いしますが、どの様な方法であの様な大きな物を旧校舎の合唱部の部室まで運搬すればよろしいのでしょうか？」

奈羽はにっこりと笑い、話す。

「それは、こっちが聞きたい！」

「そうですね、私はてつきり、親切な方がこつそり合唱部に贈り物をしてくれたものと考えていました」

「ふざけるな……。おい、岡本！ お前はなんか知らないのか！？」  
急に怒鳴られビクツと反応してしまった。

「え？ あ、はい？」

何か話そうと思ったときに奈羽がすつと手を出し静止される。

「何も言わなくていいよ。大丈夫だから」

奈羽はあたしに優しく笑いかけ、そう言った。

「合唱部の部長は私です。部員達を守る義務がありますので、質問は私にして頂けますか？」

奈羽はどうして、こんなに強気なんだろう？ 本当にピアノはど

うしたんだろう？

思い出した。最近と呼ばれないけど、中学までのあだ名は「ミラクルナウ」だった。この子は奇跡を起こす。多分きつとそう。そんな訳ないでしょ……。

「本当にお前等じゃないのか？」

「はい。確かにピアノの紛失による利益を享受しているのは、私共合唱部です。ですが、不正により利益を享受している者が必ずしも犯人とは限りません。その、図式が成り立ってしまったのならばこの世界は冤罪で溢れかえってしまいます。私共は善意無過失です。ですので、ピアノの所有権も合唱部にあります。それでも、こちらに過失があるとおっしゃるのならば、先生方にはピアノの運搬方法並びに、その他物的証拠若しくは、法的根拠の提示をお願い致します」

難しく、意味不明。寝そう。ああ、奈羽のお説教は耳に心地いい……。

あれ？ 奈羽は強奪したと言ってたっけ？ ちらりと他の三人を見ると、あたしと同じように眠そう。いや、良く見ると寝てない？

「わかった……。この件に関しては調査する。行つていいぞ」

「ご理解して頂けて感謝致します」

奈羽はいつたい、どこからそんな言葉が出てくるの……。

「しかし、本当にどこから出てきたんだろうね？ あのピアノ。偶然にも泥棒さんが部室に隠してたのかな？」

生徒指導室から大分離れ、聞こえないと思い、あたしは背伸びをしながら言う。そもそも、奈羽が強奪したって言ったのも、あたしの聞き間違いかもね。

「日和ちゃん。偶然なんて有り得ない。全ては故意の連続により起きた必然。起こるべくして起きた事象」

と、咲良が言った。なんか今日はみんな難しい言葉を使う。意味不



明。

でも、なんか咲良……、怒っている？ 顔色も悪い……、どうしたんだろう？

「ちよつとさ……。気になっていたんだけどさ……」

圭が何やら、もごもご言っている。

「岡本のさ……。後頭部にあるさ……」

いったい何を言ってる、こんな時に……。はつきりい……。え？  
何気なく頭を触ったら……。何これ？

「ああ、俺も気になっていた。ちらちらつてさ」

……。ヘアピンにビニール袋付いているんだけど……。ああ、そうか、朝からカサカサ、カサカサうるさいなあって思ってたよ。早く言え……。こんな物付けて、あたしはお説教されてたのか……。先生も面白かっただろうなあ、もしかして許して貰えたのは、あたしの手柄？ あたしって天才。ふう……。

授業も全然集中できない。先生の声が子守唄に聞こえる。

最近どうも運が悪い。今朝の事にしても、昨日の空き缶にしても、どうしたんだろう？ どうして急に？ はて？

いい日もあれば悪い日もある、それが人生だよな？

どこかの偉い人が言ってたよね。人生の運の総量は決まってるって。だから今、運が悪くてもきつと、いつか幸運に恵まれるって。きつと明日はいい日になるよ。

……。ちよつと待って。あたしは未来予知で不運を回避して幸運を掴んでいるんじゃないの？ つまり、運を不正に引き出している？ 将来の運貯金を使っている？

よく思い出せ……。急に運が悪いと感じるようになったのは昨日から。昨日はなにがあった……。？

「ああああー！」

授業中に思わず叫んでしまった……。

「ど、どうした岡本……？」

「あ、いえ、なんでもありません、すみません！」  
うう……、クラス中に笑われた……。

そんな事より、昨日はロト7の抽選日だった。そう、あたしは買っていた……。多分、というか、間違いなく一等。

人生の運の総量は決まっている。つまり……、人生の運を全部使い果たしてしまった！？

この歳で！？ あ、でも、超能力って身体に悪くて寿命縮むんだっけ？ そか、じゃあ老い先短いのか、よかった……。よくないよ！！

「はあ……」

溜息ばかり出る。お昼休みは、珍しくお外で食べる。お気に入り  
のイチヨウの木の下。

「大好物のエビカツサンドも美味しくないや……」

色々考えたけど、全部、あたしの想像で決まった訳じゃないんだよね……？

更に言えば、これは未来予知ではなくて、あたしの想像力が遅しくて、たまたま的中しているって事はないかな？……。テストの内容やロト7の的中番号が想像出来てたまるか……。

特徴のないイチヨウの木。新芽が多く芽吹き、今から夏が楽しみ。  
「あんたは特徴ないから、変わった形の葉っぱにするんだよ。例えば、葉っぱじゃなくてお花を咲かせるとか？ きつとみんな見てくれるよ」

イチヨウの木を見上げながら囁く。

「一人で何やってんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

と、言いながらやって来たのは木村悠一。すらりと背の高い、顔のいい男。悩みの無さそうな顔してやがる……。

「悠一……。ふっ……。あたしは悟ったのよ」

「何をだよ？」

「お金はね、命より重いつて事をよ。あたしの命はお金に負けちゃ

ったのよ」

「はい？　どんだけ軽い命なんだよ……」

悠一はあたしの隣に座る。

「もう！　金持ちが憎い！」

「何言ってるんだよ？　それに俺は、岡本の財布じゃなかったのか？　なら、お前も金持ちだろ？」

ムカツ。もうお金なんていらぬ。それに、あたしのお財布とか言っていたのは冗談だよ。真に受けるな。

「高校上がってさ、これからが楽しみだよな。海とか花火とかさ？」

……。ちよつと待つて。これが噂の死亡フラグ！？

「そうね。凄く楽しみ。みんなでずつと一緒にいたらいいね」

とか言ったら確定！？　あれ！？　心の声が出ちゃった、どうしよう！？

「いれるさ。ガキの頃から一緒だったろ？　これからも変わらないよ」

ちよつと待つて、悠一も。さっきの発言はどう見ても、あたしらしくない発言だったでしょ、気付け！！　あたしの人生どうなるの！？

ふう……。少し興奮しすぎた。喉カラカラ。

「そつえばさ。変な噂あったね？　あんたが女言葉使ってるのかなんとか？」

言った後に後悔……。どう考えても、ただの誹謗中傷だよね……。しまった。

「ああ、あれか」

「まあ、あんたも顔いいし、お坊ちゃんだし、やつかみ多いね……。あんまり気にしないでね……」

「別に気にしてないよ。事実だし」

「ええ！？」

「うん？　意外か？　あれはな、何ていうか、喋り方が移った。岡本の」

「なんでよ!？」

「なんでだろうな? 印象的だから? でも、岡本でよかったよ。これが咲良や奈羽だったら、ただのカマだよ」

あたしだと大丈夫なの……? そう言って頂けると光栄です。

ペタペタ。変な音。これは、あたしの足音。

ヒタヒタ。変な音。これは、誰の足音?

夕焼けが綺麗。少し肌寒いけど、でも、十分に過ごしやすい。夏は好きだけど、梅雨は大嫌い。だから、複雑。ずっと、今の季節でもいいかなって思ってしまう。でも、夏が恋しくなるのかな?

好きな事をする為には嫌な事も我慢しなければいけないって言うよね。だから、梅雨も我慢する。その先に明るい未来があるから。

ヒタヒタ。変な音。さっきより、すぐ後ろにいるような気がする。時間と共に影が伸びていく。少しずつ、あたしより前を歩くようになる。あたしも負けずに少しずつ、歩を早める。でも、影である彼女もそれに合わせるかのように歩を早める。

いつまで経っても追いつけない。少しずつ、差が広がる。あたしは一生追いつけないのかな?

ヒタヒタ。変な音。もう、すぐ後ろにいる。あたしは彼女に追いつけないけど、他の誰かは、あたしに追いつける。後ろの誰かなら彼女に追いつけるのかな?

……。って、誰よ!?

怖い……。振り返れない。現実逃避も程ほどにしないと危ない……。

まさか……。実験!? それとも、ロト7!?

家までもうすぐ、でも、今急に走ったら不自然じゃない? 追いかけてこない?

どうしよう……。誰か助けて……。

こんな事なら未来予知なんて始めから無ければよかったのに。あたしが望んだ訳じゃないのに。嫌な事ばかりだよ……。なんか涙

出てきた……。

それから、あたしは家に着くまで泣き続けた。後ろの人の気配は気が付くと消えていた。

昨日は知らない人追いかけられたり、ついてなかったけど。今日のあたしは幸運に恵まれている。

バケツの水をひっくり返してしまったけど、丁度モップ掛けの練習をしたかったところだ。ついてる。

階段から落ちそうになったけど、手を伸ばしたら丁度手すりがあり、掴む事ができた。幸運にも下まで落ちずに、おしりを少し打って涙目になったくらいで済んだ。ついてる。

未来を予知していないのに、エビカツサンドが売り切れておらず、ちゃんと買う事ができた。ついてる。

運なんて、同じ状況でも人によって幸運にも不運にも取れる曖昧なもの。そんなものに振り回されてたまるか。

今日も、お昼は咲良と奈羽には一声掛けてから、お気に入りイチヨウの木の下で食べる。凄く天気が良く、微かに吹く風が心地いい。

このイチヨウの木は相変わらず特徴がない。うつかりすると、その形を思い出せなくなる。でも個性がないところが特徴かも？ 人に限らず、木でも必ずいいところはある。見れば見るほど、この木は元気が良さそうに見える。うん、いい事だ。

「日和ちゃん」

「一緒に食べよ」

話し掛けて来たのは咲良と奈羽。手にはお弁当を持っている。

「咲良、奈羽……」

二人は優しく笑っている。なんか、嬉しい。でも、咲良は最近体調が良くないのか、顔色が悪い。凄く心配。自分の事で精一杯で、心配だけど、これ以上心配事を増やしたくなく聞けずにいた。ごめんね、力になれなくて……。

「気持ちいいね」

あたし達三人は並んで食べる。なぜか真ん中はあたし。でも、さつきまでおいしくなかったエビカツサンドが凄くおいしく感じる。

「今日はお揃いか？」

そう言つて歩いて来たのは、悠一。すぐ後ろに圭もいる。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう？」

奈羽が無邪気な笑顔で答える。

悠一と圭も加わる。圭なんていつもラーメンのくせに今日はパンを持参している。一緒に食べる気満々じゃない。

「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」

「あれ？ 元々合唱部の物じゃなかったの？」

奈羽の発言に圭が答えた。どうして合唱部の物だと思ったのよ……

……。昨日、どうして生徒指導室に呼び出されたと思っているのよ……

……。それより、合唱部の備品になるって、本当に強奪じゃない……。

「先生達に水を指されて、ちゃんと活動出来てないけど、早くみんなと歌いたいなあ」

「今更言つのもなんだけど、俺、歌マジ苦手」

「嘘言え。お前カラオケ好きじゃないか。謙遜か？」

「圭君マイク持つと放さないよね」

「訂正。合唱みたいな曲を歌うのはマジ苦手」

「別に曲の制限なんてないよ。好きなのを歌えばいいんだよ。みんな、それぞれ一曲ずつ選んで歌いましょう」

いつも通りの雰囲気。

「でも、本当は合唱部じゃなくてもよかったんだ。みんな、この五人で集まれるなら、なんでもよかった。今みたいな時間があれば、私は満足」

これは、奈羽の言葉。それは全員の言葉を代表して言ったものかもしれない。

あたしは前に、五人集まると自然って言葉で表現していたけど、今はつきりわかった。

五人集まると自然なんて言葉じゃ全然足りない。  
あたし達五人が集まると「幸せ」と言う言葉になる。

今日のあたしは幸運に恵まれた。少し元気が出た。さて帰って「天国少女・花園メグ」の再放送見よつと。  
ペツタン、ペツタン。変な音。これは、あたしの足音。昨日より軽快。

チリーン、チリーン。変な音。これは、何の音？

あ……。何かにぶつかった。

あたしはよろけてしまった。

排水溝に片足落ちた。肩が壁にぶかった。痛い。

なんか、足痛い。ふくらはぎが擦りむけた。

排水溝から足を抜くと、靴がびしょぬれ……。なんか汚い……。

「買って貰ったばかりの靴なのに汚れちゃった。ちえ……」

まっ！ 大怪我しなくてよかった。ついてる。

……。

足、冷たいよ……。

……。

足、痛いよ……。

……。

肩、じんじん痛いよ……。

……。

なんか、悲しいよ。悲しいよ。

もう歩けないよ……。

あたしは、夕日の中うずくまって泣いた。子供みたいに泣いてしまった。

よくわからないけど、悲しかった、寂しかった、怖かった。

やっぱり、ついてないよ。

誰か助けてよ……。

なんか、急にあたしに、ふわっと覆いかぶさって来た物がある。

それが、人だつてわかるまで、随分長い時間が掛かった。

「日和、大丈夫だよ。心配いらないよ……」

その優しい声は聞き覚えがある。

奈羽だ。

「な……う……？」

「何も言わなくていいよ。全部知っているから」

あたしは奈羽にしがみついて泣いた。なんかよくわからないけど、  
凄く沢山涙が出た。

「少し長話になるかもしれないけど、我慢して聞いてね」

彼女はゆっくり話した。

「今日の日和は凄く辛いよね。辛くて、辛くて、泣いてしまったよね。でもね、辛くて、苦しくて、悲しい事も悪い事ばかりじゃないんだよ。」

奈羽の身体、凄くあつたかい……。

「だって、それがどんなに苦しくて辛い事かわかったんだから。もし、大事な人が同じように辛い思いをしていたら、理解してあげられる、そして、優しくしてあげられる」

凄くいい匂いがする。何の匂いだろう？ お花？

「生まれつき優しい人なんていないんだよ。優しい人はそれだけ、過去に辛く苦しい思いをしてきているの。だから、優しくなれるの」  
何か心地いい……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すごくゆっく。

「今日辛い思いをした日和は昨日の日和よりもずっと優しい人。そして、これから日和はいつぱい辛い思いや悲しい思いを思うと思

う。いつぱい泣くと思う」  
凄く耳に心地いい、ゆっくりとしたイントネーション。

「でも、その一つ一つを乗り越える度に、日和はどんどん優しい人になって行く、誰よりも優しい人になる。私が保証する、日和がみんなの辛さ、苦しさ、悲しみ、その全てを理解して、それを受け入れ、そして、誰よりも優しくしてあげられるって」



いつの間にか奈羽はあたしの顔を両手で優しく包み、優しく微笑む。

「よくわからないよ……」

「そうね。でも約束して、辛い事があっても逃げない、目を背けないって」

「う、うん……。頑張る……」

本当に意味がわからないけど、凄く励まされている……。と思う……。

「うん。約束。じゃあ、帰りましょう。暗くなっちゃう前に」

奈羽は、まだしがみつくあたしを引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し出す。

あたしは迷わず奈羽の手を掴んだ。奈羽はにっこり笑ってくれる。夕日の中、二人で手を繋いで歩く。

奈羽はあたしより小さい。でも、凄く大きい。こうして並んで歩いているけど、奈羽が先に歩いて、あたしがその後を付いて行っているような感覚がある。それは、奈羽があたしの手を強く、強く握り締めているから、そう思うのかな？

あたしは一人っ子だからわからないけど、もし、お姉ちゃんがいたら、こんな感じなのかな？　ただ、安心できる。こんな気持ち、久しぶり……。

ずつと、このまま手を繋いでいたい。

そう、思うけど家に着いてしまった。

「足は大丈夫だけど、肩はちゃんと、お母さんに手当てし貰うんだよ。あとで腫れて大変な事になるから」

「うん……」

「また明日ね。日和」

奈羽の後ろ姿を、ただ呆然と見送る。

「あ……」

突然来た。未来予知。

「あたし……。明日死ぬんだ……」

少しずつ奈羽の姿が小さくなる。

「奈羽行かないでよ、助けてよ……」  
そして、奈羽の姿が見えなくなる。

「な……う……」

もう声なんて出ない。何も考えたくない。そして、涙すら出ない。いつの間にか空は曇り、今にも雨が降りそう。凄く寂しい雰囲気。奈羽と共にあたしの幸せはどこかに消えていったみたい。

今日は学校を休んだ。昨日の奈羽の忠告を無視して、肩を放置していたら腫れた。

朝から病院。骨には異常なかったけど、重度の打撲。凄く痛かったけど、今は鎮痛剤のせい、平気。

ふとんの中から少し顔を出して、天井を見る。

昨日来た、未来予知の事を考える。

よくわからないけど、あれはどこだろう？　ただ、漠然とあたしが死んでいるイメージ。もしかして、あたしの勘違いとかなのかな？　昨日は凄く情緒不安定で、奈羽の後ろ姿を見送っているうちにおかしくなったとか？

別に体調が悪いとかはないけど、鎮痛剤のせいか眠い。  
うつら、うつら。今のあたしにぴったりの擬音。

夢を見た。

子供の頃にうちの裏山にみんなで秘密基地を作った夢。

「立派なお家を建てましょう！」

奈羽はいつもリーダーだった。どうして、そうだったんだろう？　リーダーらしい言動はないのに。みんなが自然と、その言葉に従った。

「立派だったら、秘密じゃないでしょ」

多少の不平不満はあったけどね。

「俺、木切ってくる」

圭が奈羽の構想を一番先に実現しようとする。

「今の内に家からこつそり絨毯とか持ってくるね！」

咲良も限度を知らないくらい頑張る。

「作るの、だるいからさ、プレハブでもここに運ばせる？」

悠一は、何でもお金に物言わせる嫌な奴だった。

「悠一、みんなで作ることが大事なのよ。結果なんて関係ない」

意味不明なお説教は奈羽が担当。思い出せば、この頃からかな？

奈羽が得意げな意味不明なお説教をするようになったのは。今では、洗練されて先生までも騙される。

「どうでもいいけど、日が暮れるまでには建ててよね」

あたしは不平不満担当。

木に屋根の様な物をくつつけて、蔦とか葉っぱで補強。簡単な秘密基地だ。中は咲良が自宅から持ってきた絨毯とか本棚みたいな家具がある。

「完成、立派なお家！」

奈羽は両手を大きく広げて大喜び。

そうなんだよね、みんな奈羽が、こうやって楽しそうに、喜んでいるのを見るのが好きで頑張っていたんだよね。ただ、それだけだったよね。リーダーとか関係ないよね。

秘密基地は雨とか風とか、色々な事で、掃除しても掃除しても、すぐ汚くなって放置されたけど、あたし達の幼い頃の一番の思い出。夢の中、遠くで変な音がする。鈍い音。

「朋ちゃん、大丈夫？」

これは何の夢だろう……。

「ごめん。挫いたみたい……」

そうだ、中学の時のオリエンテーションの時だ。

「困ったね。歩けそうにない？ 先生もいないし、どうしよう……」  
班の子が足を挫いて途方に暮れていた。

「圭？ 今どこ？ 男の子達連れて、B地点の少し先まで来て」  
そう、話したのは奈羽だった。圭がいるのかと思ったら、手にしているのは携帯電話。

「今、応援呼んだから、心配いらないよ、朋子」

携帯電話の持ち込みは禁止だったはず。

「携帯持つてるの見つかったら、先生に怒られるよ……」  
班の子が言う。

「気にしない。それよりも、みんなの命に関わるような事故が起こった時に携帯がなかったらと思うと、そっちのほうが怖いよ」

奈羽は勉強以外で先生の言う事は一切聞かない子だった。全て自分の判断で自信を持って自分の正しいと思う事をした。

「来た、来た。圭！ こっちだよ！」

それから、悠一が足を挫いた子をおぶって山を降りた。

女子をおぶった悠一よりも、その他の女子よりも、圭が一番「ぜえぜえ」言っていたのはおかしかったけどね。

なんか、奈羽の夢ばかり見るね……。多分の昨日の事が嬉しかったからかな……。

なんか、鈍い音がする……。

ああ、なんか気持ちよくなってきた……。ふわふわ……。

飛んで行くような、沈んで行くような……。

気持ちいい……。良く眠れそう……。おやすみなさい……。

## 第二章

### 第二章 木村悠一の場合

夢を見た。

子供の頃に仲間達で秘密基地を作った事、中学でのオリエンテーションなどの夢だ。

「奈羽の事ばかりだったな……」

俺は木村悠一。そう、木村悠一だ。酷く、片平奈羽への感情で溢れている。

別段、彼女の事は嫌いではなかった、尤も好きと言う程でもない。今の様な感情など抱いた事もなかった。

意外。そう、意外だった。

「恋愛感情でもない……かと、言って友人へのそれでもない……。気味悪いな……」

しかし、岡本の奴、人の事をお坊ちゃん、お坊ちゃん言っただけにしてはいたくせに、あの秘密基地の裏山や周辺の土地は全部岡本家所有じゃないか。お前も結構なお嬢だろ……。おかしいと思ったよ、あれだけ好き勝手に木を伐採したのに、何の問題にもならないんだからな。

あ？ 俺はいったい何を考えている……？

やばい……、現実逃避も程ほどにしないと……。って、あれ！？

俺、誰よ！？

木村悠一だ……。それは間違いない……。

やばい、妄想が止まらない……。なんか、鼻血出そうだ……。

俺はそんなキャラじゃないだろ……。

月曜日の朝。天気がいい。明るい未来を暗示している。

「じゃあ、行っってくるね」

俺がそう言っていると、両親がピクリと反応した。

「あ、いや、行って来ます……」

俺はいつたい何を言っている……？

おかしい、何かがおかしい。夢のせいかな？ 大体、この岡本への妄想はなんなんだ？ まさか、自分でも気が付かないうちに、あいつに惚れたのか？

「そんな訳ないだろ……」

悩みは尽きない。前方を見ると、その話題の岡本日和と宮原咲良の姿が見えた。

「おはよう、お二人さん」

俺は早足で二人に追いつく。

「おはよう」

「おはよう、相変わらずいい顔してるね」

咲良と岡本が挨拶を返す。岡本はいつも俺をからかう。「いい顔してる」とか「お坊ちゃん」とか、言ってな。

まあ、少なからず顔には自信はある。家も地元の富豪だ「お坊ちゃん」なのも間違いない。だが、岡本の言葉を素直には受け取れない、棘の様なものを感じる。

岡本の顔を見る。ショートのと髪と、よく変わる表情。よく動く大きな目。身振り手振りで話す様は可愛い。こんな妹が欲しいと誰もが思うだろう。

一方、咲良を見ると、落ち着いた雰囲気、長い綺麗な黒髪。じつと相手の目を見て、優しい表情で話を聞いてくれる。こんな姉が欲しいと誰もが思うだろう。

「おはよう、みんな」

角を曲がり、明るく挨拶をして来たのは、片平奈羽だ。

なんだ？ これ？ 彼女を見た瞬間、息が詰まった。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね、寝不足？」

「うん。徹夜でゲームしてた」

なんか、泣きそうになる。

なんだよ、これ！？ やばい、本当に涙が零れる。

その時、後ろから慌しく走って来る足音が聞こえた。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

息を切らして走ってきたのは、伊吹圭だ。

「伊吹……。ぜえぜえって擬音か？」

俺は涙を堪える為に適当な事を言ってみた。声に出して言う事で気分が晴れたのか、先程までの、あの異様な胸が詰まる感情は消えていた。

「何か面白い表現だね」

「あんたは、もう少し余裕を持って行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

はぁ、はぁ……。俺は病気だ。間違いなく病気だ。

大体、岡本が超能力者って、何の冗談だよ？ はて？ はて？

教室では騒がしく、雑談に華を咲かす。

クラスの奴に軽く挨拶をしながら進む。

「聞いた体育館のピアノの事？」

それは、不思議と耳に入った。数多い雑談の中から、まるで、それだけが大声で話されたかの様だった。

「なんか、先生達が騒いでいたね」

俺は思わず立ち止まった。ピアノと言う単語に違和感を覚えたからだ。

「悠一？」

後ろから、伊吹が疑問の声を投げ掛ける。

「あ？ ああ、すまん」

俺と伊吹はクラスが同じだ。他の三人は、それぞれが別のクラス。俺と伊吹だけが同じクラスだ。伊吹の席は俺の三つ前なので、その進路を塞いでしまっていた。

俺は自分の席に座り考え込む。

が、どうしても思い出せない。

それよりもだ。岡本の件はどう思う？ どうして、俺の知らない岡本の行動を妄想してしまうのだろうか？ 普通の行動ならば、まだいいが、ちよつと、あれはまずいだろ……。やばい、鼻血出てきた……。

病気だろ……。病院行くか……。

いや、なんて言うんだよ？ 女子高生の私生活を妄想しちゃいますってか？ 死んだほうがマシだ……。

逆に正常です、とか言われたら立ち直れないよな……。最悪だぜ、机の中からは変な手紙は出てくるわ……。

って、何これ！？ ラブレター！？

これは、ラッキーと言えばラッキーだよね！？

……。駄目だ……。ノリがまるで岡本だ……。

俺は少し、自分自身を見つめ直さなければいけない。

昼には金ある癖に岡本にたかられるわ……。少し言葉遣いも悪いな……。自分が今までどんな人間だったかすら忘れてきている。完全に病気だ。

俺は昼食前に倉庫裏へと向かう。手紙の送り主からの指定だ。

別段、嬉しくはない。よくある事だ。ふふふ、当然だ、俺って天才。

って、日本語になってないよ！？……。誰か助けて……。

体育館の隣にある、倉庫。二階建ての結構頑丈な作りだ。もし、隣に更に立派な体育館が無ければ、こちらの倉庫が体育館かと錯覚してしまうだろう。などと、考えている暇はない。

この街は山々に囲まれた盆地にある。冬は寒く、夏は暑い。いや、夏の暑さは耐えられる。問題は梅雨の季節だ。湿気と高温、まさに熱帯雨林だ。遠くに大きな観覧車が見える。あれは、この蛍里市名物「ジェット観覧車」だ。などと、考えている暇はない。

人の気持ちというのはうつろい易い。例えば、天気は左右された



りもする。天氣が良ければ気分が良い、悪ければ、その逆。今の俺の気分も、この晴れ渡った天氣そのもの。しかし、いつの日かその外的要因に左右されずに自分の内面の心情が反映される日もくるのだろうか？　それが大人と言うものだろうか？　ああ！　などと、考えている暇はない！　手紙の送り主はどこだ！？

いた。彼女に見覚えはなかった。尤も、同じ学校と言う事もあり、わずかな記憶の中にはあるだろう、今はゆっくりと思い出す暇もない。

「あ、あの木村君、付き合って下さい！」

うん。それなりに綺麗な人だ。髪は肩よりも少し長い程度、色素が少し薄い、抜いているのかな？　肌の艶も良い、しっかり手入れされている。岡本とは大違いだ。

「あ、あの。もしかして、他に好き人いるんですか……？」

返答の無い俺に不安を覚えたのか、彼女は言う。

「その前に名前。まだ名前聞いてないよ？」

「え？　柳です。柳朋子です。中学の時から一緒の……。一年の時は同じクラスでした……」

しまったあ！？　だが、そう聞いても名前と顔が一致しない。どこかで見たかもしれないといった程度だ。はて？

思い返して見ると、俺には友達も知り合いも、岡本やいつもの連中しかない。もちろん、同じクラスならば、それなりに話すが、決してそれ以上にはならなかった。なぜか？　と問われれば返答に困る。そうだった、としか言いようが無い。

「他に好きな人がいるんですね……？　片平さんですか？　やつぱり、私では敵いませんか……。そうですよ……。あの人は同姓から見ても綺麗な人です。何をやっても完璧で、先生からの信頼も厚くて。誰でも彼女の事を好きになっちゃいますよね……」

何を言っている……。

「ありがとう。奈羽の事を褒めてくれるのは悪い気がしない」  
これは俺の本心だ。

「今の言葉で諦めが付きまして……。こちらこそ、はっきり言ってくれて、ありがとうございます……」

柳朋子と名乗った彼女は、そのまま走り去ってしまった。

「って、俺はつきり言ったか!? それよりも、どいつもこいつも「なうなうなうなう」って、いつその事「ナウ教」でも作れ。でも、ナウ様か……。いい響きだ……。俺もナウ教に入るか……」

学食では既に他の四人がいた。いつもの場所だ。柱の裏の窓際。

何らやら瞬間移動の話をしている。そういえば、岡本は超能力者なんだっけ? そんな訳あるか……。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ」

俺は開いていた岡本の席の隣に座り言う。

超能力雑談の中、岡本一人が険しい顔でエビカツサンドを睨み付けている。

まさか……。超能力でエビカツサンドを二つに分裂させるとかないよな……。? 止めてくれよ、そんなミステリー……。そんなにエビカツサンドが好きなら買ってやるよ……。いや、本当に分裂させるなよ?

「どうした岡本? そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか?」

俺は怖くなり、冗談を口にした。

「え? ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんてある訳ないよ」

と、岡本が答える。

そんな事は知っている。余りにも好き過ぎて、人目もはばからずに超能力を使って、エビカツサンドを二つとか三つに分裂させないか心配なんだよ……。

放課後に何気に遠回りをする。校庭の外周には数多くのイチヨウの木が植えられている。大小様々で遠くから見れば、酷く雑然とし

た印象で、ただの雑木林だと思う事だろう。だが、利点もある。目絵印として有効活用が出来るのだ。過去の先生の名前や生徒の名前が不明だが、様々な名称がある「イルカの木」「アーシエタワー」「信也スペシャル」「闇星一番」などなどである。その名を聞けば、どの場所がすぐに分る。

奈羽だ。机を二段重ねにして運んでいる。

酷く重そうに見える。だが、歩場が小さく、チョコチョコと少しずつ進む様は、非常に可愛らしい。少し、見ていよう。

あ、転んだ……。

「奈羽、大丈夫か!？」

俺は慌てて駆け寄る。先程の自分の思考を後悔する。奈羽は転んだまま俺を見て言う。

「やつぱりね……。悠一の仕業だったんだ……？」

「なんでよ!？」

しまった!!

「冗談だよ。でも、今、日和みたいなしやべり方だったね？」

やばいよ……。どうしよう……？

俺は、時間と共に岡本になって行く。自分でも酷く可笑しな事を言っていると思う。まさか、これが奴の超能力か!？ それは、俺だけではなく、学校全体、いや、この街そのものが、既に岡本の超能力攻撃を受けているのではないだろうか？ 全員総岡本化……。

俺の頭の中では「なんでよ!？」「なんでよ!？」と言う言葉がグルグルと駆け回る。

……。現実逃避が止まらない身体になってしまった……。

「悠一？ どうしたの？」

「あ、いや、なんでもない……。机運ぶよ」

俺は、そう言い。机を重ね持ち上げる。重い……。奈羽はこんな重い物を運んでいたのか……。可愛そうに……。

「ありがとう。悠一は優しいね」

奈羽が微笑んでくれる。それは、まるで親に褒められた時の感情

に似ていた。

昔からそうだったな……。俺達五人は家族みたいだと思った事もあった。兄弟とか姉妹じゃなくて、家族だ。父親或いは母親が奈羽、長女に咲良、その下に俺。そして更に下に伊吹と岡本。呼び方も奈羽と咲良の二人は下の名前で呼ぶのも、多分、俺が二人に甘えているから。他人に泣き言など言わないが、奈羽と咲良には言えた。

「合唱部ね。明日から活動しましょう」

合唱部。奈羽が提案し、創部したものだ。

「へえ。もう活動できるのか。なんか、岡本とか伊吹がしぶってなかったか？」

「大丈夫だよ。きつと気に入ってくれる。私はそう信じている。悠一もきつと気に入るよ」

奈羽がどこか夢見る様に楽しそうに言う。そんな奈羽を見るのは好きだ。

「そうだな。そもそも、俺等五人で集まれば、なんだって面白いよな」

「そうね。本当にそう……」

机を倉庫に片付け、俺達二人は旧校舎の前まで来る。

「日和、あ、悠一か……。ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしててね」

奈羽はそう言うと、旧校舎の中へと消えていく。

ちよつと待て……。今、俺と岡本を間違えなかったか？

もしかして……。姿形まで岡本に似てきているのか！？ 俺の人生どうなるの！？

今日は朝から低調だ。自分自身に起きた事象について考察し、眠れなかった。

この岡本の記憶はなんだろうか？ ただ、細部に渡り、検証した結果、岡本視点での記憶と俺の記憶での矛盾点は見つける事は出来なかった。

つまり、事実であるかもしれない、と言う事だ。だが、それも俺が無意識の内に俺の記憶から導き出された予測であるかもしれない。そんな訳あるか……。それでは俺が別の意味での超能力者だよ……。

それより、問題となるのは、思わず「岡本語」が出てしまう事だ。何度、両親やクラスメートを凍りつかせたかわからない……。

更に岡本視点での記憶の追跡は危険だ……。出血多量で死んでしま……。

当然、その様な理由から岡本本人と俺の記憶との一致を確認する術がない。聞ける訳がない……。いったい、何を言われる事やら……。警察と呼ばれるのはまだ許せるが、それが救急車であつたならば、俺のプライドはもう修復不可能だ。

気が付けば放課後だ。最近、どうも考え込んでしま……。

合唱部の活動初日。俺は旧校舎の二階へと向かう。

薄汚れた壁、ほとんど掃除がされてないであろう階段。隅には綿埃が溜まっている。

階段には各部の勧誘ポスターが貼つてある。オオクワガタ同好会つてなんだよ……。いや、それより庭部つてなに？俺の想像通りならすげえ楽しそうなんだけど。

あれだろ？庭に芝生敷いてさ、ビーチパラソル挿して、みんなでバーベキューとかするんだろ？なんかビニールプールとかも用意してさ？……。やばい、現時逃避がやば過ぎるよ……。なんか口調までおかしいよ……。

合唱部の前には既に咲良と伊吹が来ていた。岡本の姿は見えない。「よう。中入らないのか？」

「奈羽ちゃんかね。みんな揃ってから、入ってきてって」

「岡本と一緒にじゃなかったんだ？」

俺の挨拶に咲良と伊吹が答える。

「いや、知らないな……」

今は岡本の顔を正面から見れる自信がない……。

「悠君。何か悩んでいるね？ 私にならわかるから、いつでも相談してね」

咲良の言葉に驚く。まさか……。咲良も岡本の超能力攻撃を受けているのか！？

更に何か伊吹の態度も異常だ。居心地が悪そうと言つか、視線が泳ぐ。

「ああ……。相談するかもしれない。その時は頼む、咲良」

俺は平静を装い、そう言うのが精一杯だ。

「うん。待ってる」

咲良が優しく言ってくれる。その時、岡本が暗い表情と、とぼとぼと、まさにその擬音が似合う足取りでやってくる。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入ってきてって」

「お前はもつと余裕持って行動しろよ」

それぞれが、岡本に一声掛ける。

「そちもわるよのお……」

お前は悪代官か……。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

伊吹も乗るな……。

「じゃあ、行くぜ？」

扉の一番近くにいた伊吹が開ける。

よく油が挿されているのか、扉は音もなく開く。

光が広がる。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が満面の笑みで、両手を大きく広げ叫ぶ。

何か不思議な光景だった。幻想的。そう、幻想的だった。酷く現実感が消えていく。音も消えて行く……。

「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」

奈羽が何か言っている。だけど、言葉として頭に入ってきて来ない。でも、凄く涙が出そうだよ……。

あたし、大事な事、忘れてる……。

「ここ、景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」  
「どれどれ？」

……。つて、あたし！？ 嘘！？

はあ、はあ……。なんだ？ 俺はいつたい何の病気なんだ？ もう誰でもいい、救急車呼んでくれ……。

「気に入って貰えたら嬉しいなあ」

「うん。気に入った。ピアノも、その、かつこいいね……」  
「いったい、この人達は誰と何の話をしているの？」

呆然とする。

何か現実感が乏しい。

ゆっくりとしたメロディが聞こえてくる。そして、綺麗な歌声が流れる。

一番目の私は猫だった、我儘気ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかった。

二番目の私は犬だった、猫さんが心配だった夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目の私は兎だった、何もかもが不安だった夢の世界、流れるままに朽ちていく。

四番目の私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目の私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだった。

泣いていいよな……？

マジもつ無理。立っていられない……。

「悠……」。そんなに感動する曲だったか？」

「でも、ちよつと悲しい感じするかな」

「あたしも泣きそうだよ……。うう……」

「ああ……。日和ごめんね、泣かないで。大丈夫だからね、心配いらないよ」

奈羽が岡本を抱きしめている。

「あたし、歌うならもつと楽しい曲がいいよお。なあうう……」

「そうね。ごめんね。私の配慮が足りなかった。次は日和が好きそうなのを選んでくるね」

誰か、俺も抱きしめてくれ……。咲良……。いや、伊吹でもいい……、お前で我慢する。

だが、岡本も泣いてくれてよかった。

部活も終わり、旧校舎から出る。

外は風も強く、流れる雲も早い。

驚く程に黒い雲とその合間から覗く、恐ろしく青い空。

既視感。それは、どこから来る思いだろう。

俺はこの光景を覚えている……。

俺はほぼ、無意識に反射的に、岡本へと吸い込まれていく空き缶を伊吹よりも早く叩き落していた。

「え？」

伊吹がかすかに驚きの声を上げる。岡本に至っては空き缶の存在すら気が付いていない。

手の甲が少し切れた。少しずつ血が滲む。

誰も声を出さない。

「悠一？　大丈夫？」

先に声を出したのは、ようやく状況を把握した岡本だった。

「あ？　うん」

傷が深いのか、血が一滴ゆつくりと地面に落ちた。

「ああ！？　大丈夫！？」

俺は岡本に引きずられて保健室に連れて行かれた……。



保険室には先生がおらず、岡本に手当てをされる。何気に上手だが、さすがに大袈裟だ。包帯までは必要ない。先程から酷く岡本の記憶が様々思い出される。

「09 13 14 30 37 38 47」

と、俺は呟く。ぴたりと岡本の包帯の巻く手が止まる。

「ふうん……。悠一にも予知あるんだ？」

「ないよ。これはお前が買ったロト7の番号だ」

「何言ってるの？ あたしは五口買ってるんだけど？」

「他は知らないよ。これは、お前が予知した番号だ」

「よし。終わり！ ありがとね、助けてくれて」

治療が終わり、岡本は元氣よく立ち上がり背伸びをする。

「お前、それが原因で死ぬぜ？」

「何言ってるの？」

実際はロト7が原因だったか思い出せないが、凄く関連がある気がする。

「あ、今、予知きた。悠一のその予言外れるって」

え？

「でも、心配しないで。当選金の悪用はしないみたい。全額、自然愛護団体のフアリアスに寄付するはずだから」

岡本はにつこりと笑い親指を立てる。今まで見た事のない表情だ……。

この人は誰？ 俺は誰？ 岡本日和？

「おなかすいたあ。晩御飯何かなあ？ 悠一なら知っているよね？」

何か背筋が凍る。

「今ね、色々予知来たんだよ？ 悠一が何者かわかったかも？ ふふ、先帰るね」

岡本が保健室から出て行く。

「ちよっと待てよ。お前誰だよ？」

「岡本日和に決まってるじゃない？ 何を今更？」

今まで、俺の記憶と岡本視点での記憶の食い違いは一つたりとも

なかった。

だが、今日、始めて食い違った。そう、合唱部で奈羽の歌を聞いて泣いてからだ。

そして今まで、酷く身近に感じていた岡本が、別の他人に見えた。気が付くと、彼女の姿は消えていた。

昨日は全く眠れなかった。いつたい俺が何をした……。そもそも昨日のあれはなんだったんだ？ これも岡本の超能力攻撃か？

何度、病院に行こうかと思った事か……。でも、本当になんて医者に言うんだよ？

実は俺、女子高生なんですってか？ 死んだほうがマシだ……。逆に奇遇ですね私もです、なんて言われたら立ち直れないよな……。いわねえよ……。

日に日に現実逃避が激しくなる……。

最悪な事に合唱部揃って生徒指導室に呼び出されるわ。何やら奈羽が熱心に語っている。眠くなってきた……。ああ、奈羽の説教は耳に心地いいなあ……。なんでこんなに気持ちいいんだろうな？ 静かな感じなのに耳にすつと入る。一音、一音がちゃんとはつきりしていると、一切濁った感じのしない話し方なんだよな。決して棒読みではない、低音から高音の移行が凄くスムーズで……。それがぐるぐ……。る……。

「わかった……。この件に関しては調査する。行つていいぞ」  
やばい、寝ていた……。

昼食も一人で屋上に来てしまった。

生徒もまばらだ。奥では数人の女子が楽しいそうに談笑しながら弁当を広げている。混ざりたい衝動に駆られる。

屋上に大きな天体ドームがある。それは、酷く屋上からの景觀を損ねている。

「天文部の様にあんな物を買わせるよりは可愛いかな……」

と、一人呟く。もちろん、それは合唱部のピアノの事だ。いや、待て。あのピアノってベーゼンドルファだよな？ 俺の記憶が確かなら、相当高額なはずだ……。先生達も必死になる訳もわかる……。だから奈羽に目を付けられたのか、気の毒に。

校庭を見ると、木の下で大好物のエビカツサンドを食べている岡本が見えた。

「あいつ……。いつも信也スペシャルにいるよな……」

と、呟く。信也スペシャルとは、いつも岡本がいるイチヨウの木  
の事だ。昔の在校生の佐藤信也があの木の下に大量のエロ本を埋めたのが始まりだ。その手の生徒が集いだし、大勢で読むようになり、いつしかエロ本の木、信也スペシャルと呼ばれるようになったとか、ならないとか？ 今だに大量に埋まっているとの噂もある。誰も近寄らないが、恐らくこの学校一有名なイチヨウの木だろう。

「日和ちゃんのところに行かないの？」

いつの間にか隣に来ていた咲良の発言だ。咲良も岡本を見ている。

「なんでだよ？」

「うん？ 日和ちゃん元気なかったから？ 可愛そうに……。あんなに寂びそうにしてるよ……？」

確かに、何か思い詰めているような気がする……。だが、昨日の岡本の態度が妙に心にわだかまる。あれは岡本だったのか？ 俺の記憶にあると岡本とは違った。そう、俺の中にある岡本視点の記憶と違うのだ。その記憶によると、俺は今から岡本の所に赴くはずだ。しかし、それでいいのか？ 単純に怖い、その一言に尽きる。

「心配じゃないの？ 日和ちゃんの事好きなんですよ？」

「なんでよ！？」

しまった！！

「あら？ 反応まで日和ちゃんにそっくり……。そこまで好きなのね？ 奈羽ちゃんに報告してこないと！」

「だから、なんでよ！？」

駄目だ、止まらない……。誰か助けて……。

「そ、それより……、咲良のほうこそ大丈夫なのか？ 顔色悪いぜ？」

「ごめんね……。私は奈羽ちゃん一筋なの……。悠君じゃ駄目」

「ええ！？ 嘘！？」

俺の知らないところで世の中動いている！？

「本当に日和ちゃんと話しているみたい」

咲良に笑われた……。でも、咲良もそう思ってた事は、やっぱり、俺は岡本日和？

じゃあ、あそこでエビカツサンド食っている奴は誰なんだよ……。まさか……。あっちが本物の木村悠一か！？ どんなファンタジーだよ……。

いや、待てよ？ あっちが木村悠一としたら……。えっと、ちょっと待て……！

はあ、はあ……。この妄想はまずい……。危険過ぎる、ひとまず禁止だ。

俺は俺を信用できないぜ……。

……。

信也スペシャル！？ やばい、止めないと……！

「ちよっと、様子見に行ってくる……」

「うん。日和ちゃんの事、お願いね」

俺は咲良に言い、急ぎ階段を駆け下りる。

「ひ、一人で何やってんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

俺は息を整えつつ言う。

「悠……。あたし達、これからどうなるんだろうね？」

「え？」

やはり、俺の中にある岡本の記憶と違う。それとも、これは俺の妄想だったのだろうか？ いや、でも、これは想像の範疇を超えている生々しさがある。

そう、記憶ではなく、感情、思い、痛みを伴いながら、それを体

験しているかの様な生々しさなのだ。

「ずっと、みんなで一緒にいたいよ……。夏には海行ったり、花火したり」

死亡フラグ！？ 今度はお前か！！

「いれるさ、俺等ガキの頃から一緒だったろ？ これからも変わらないよ」

とか言ったら確定！？ あれ！？ 心の声が出ちゃった、どうしよう！？

「うん。そうだといいね。でもね、不安なんだよ。色々ね」

岡本？

「色々考えるんだよ。昨日、悠一の予知外れるって言ったの、嘘かも」

え？ 明後日、岡本が死ぬ？

「不安なんだよ……。奈羽も圭も咲良も変だし。あ、あんたが一番変か。悠一もあたしの口調真似するの止めなよ」

真似てはいない……。出てしまっんです……。

「それは、気をつけます……。でも、岡本がそんな事、考えているとは思わなかったよ」

わからない……。この岡本はどう見ても岡本だ……。じゃあ、俺は誰なの！？ いや、だから木村悠一だろ……。

「それは考えるよ。怖くて、怖くてしょうがないよ」

なんだろう？ 素直？ 俺の時は妙に意地張っていたような？

やつぱり、この子誰？ 内面まで岡本になってきた……。

「誰か助けてよ……」

岡本が震えている……。もちろん芝居には見えない。去来する思いは同情だろうか？

「安易に大丈夫だ、とは言えない状況だけど。俺がなんとかするよ」  
俺が、木村悠一なのか、岡本日和なのか、もはや分らない。だが、今、目の前にいて、震えている岡本を放置する事は出来ない。その気持ちも、俺の物なのかあたしの物なのかも分らない。

……。常識が邪魔をして前に進めないよりはいい。  
俺はあたしだ。

状況を整理しよう。明後日、岡本日和が死ぬ……。なんで？ なんてだろう？ 記憶が曖昧なんだよね。なんか布団に入って夢を見ていたら死んでた？ そんな事あるか……。もしかして病死か！？ なら、どうしようもないね。諦めろ、岡本日和。

いや、よく思い出せ……。何かあるはずだ。岡本って頭悪いからなあ、記憶力までない。どうやって、この高校入ったんだ？ ああ、思い出した、なんとなくわかったんだ、問題。本当に超能力者かよ……。そういえば、奈羽と咲良は凄い頭いいけど、圭って頭悪いよね。あれも超能力者？ いや、現実逃避も程ほどにして下さい……。思い出した。今日、放課後に誰かに付けられていた。尤も、多少の記憶違いがあり、実際に起こるかはわからない。

だが、もし誰かが付けており、その人物がわかれば一歩前進かもしれない。

俺は放課後に岡本を待ち伏せする。

来た。ペタペタ言いながら歩いている。

俺はヒタヒタと足音を殺しながら追跡する。ヒタヒタ？ 変な擬音。

夕日が綺麗だ。薄いオレンジ色の空に、夕日に照らされた濃いオレンジ色の雲。角を曲がり、夕日を背にして、影が伸びる。少しずつ、少しずつ、影が伸びて、俺の前を歩くようになる。彼は俺よりも歩くのが早い。俺も負けじと歩を早める。少しでも彼に追いつきたい。だが、どこまで行っても追いつけない。どうして、君はそんなに歩くのが早いのか？ 元々君と俺は一人の人間だったじゃないか……。

……。って、気が付けば岡本が目の前にいる！？ 現実逃避も程ほどにしないと……。

どう考えても気付いているよね？

あれ？ 振り返らない……。声を掛けようかな？ 岡本？ もしかして泣いてる？

いや、ちよつと待て……。他に人影はない。

そういえば、俺、結構足音殺して付けてたよね？ ヒタヒタって

？ ヒタヒタ？

もしかして、後を付けていたのは俺？

なあんだ。よかった……。よくないよ！！ うん？ 誰も付けて無かったんだからよかったじゃん。ああ、そっか……。いや、俺が付けていた事には変らないから、よくないよ。じゃあ、どっちよ！？ でも、可愛そうだから、声を掛けよう……。いない……。いない……。

ただ時間が過ぎて行く。ここ数日睡眠不足だったせいか、昨夜はよく眠れた。

人間、割り切れば落ち着く。俺はあたしなんだから。それでいい。今日の岡本の予定はなんだっただろうか？

全く思いだせない……。思ったけど、これは俺の記憶力が悪いのではなく、岡本本人が覚えていなくてではないだろうか。

お昼にみんなでお昼食べました、嬉しかったです。なんて日記が見えるぜ……。

学校帰りに奈羽と手を繋いで帰りました、嬉しかったです。と言う日記も見えるぜ……。

「悠一。奈羽とか知らない？」

昼食時間に手に大量の菓子パンを持つ伊吹に話し掛けられる。お前、いつもラーメンじゃなかったか？

「ああ、多分、信也スペシャルにいるよ。行くか？」

「おう、腹ペコだ」

信也スペシャルに行くと、予想通り岡本、咲良、奈羽の三人が並んで食べていた。

「今日は、お揃いか？」

俺は声を掛ける。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう？」

と、奈羽が優しく誘ってくれる。俺と伊吹は三人の前へと座る。

「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」

「あれ？ 元々合唱部の物じゃなかったの？」

「あんたは、何で昨日生徒指導室に呼び出されたと思ってるのよ…

…。合唱部の物の訳ないでしょ……」

と、伊吹の質問に奈羽ではなく岡本が答える。

「じゃあ、なんで部室にあるんだよ？」

「さあ？ 神様がくれたんでしょ？」

「そんな馬鹿な……」

「それはね、トリックがあるの。咲良も言ってたよね？ 偶然なん

て有り得ない、全ては故意の連続により起きた必然って。つまり、

故意の連続の一番最後に私が割り込んだの。私はただ一言、旧校舎

二階の一番奥です、って言っただけ。詳しくは言えないけどね」

奈羽は人差し指を立てて自慢げに話す。

奈羽に関しては、何をやっても不思議ではない……。気にしない

事だ。

「みんな知らないと思うけど、奈羽ちゃんね、天才なんだよ！」

知っているよ……。

「えっへん」

威張るな……。

「はい、はい……」

「もう、日和もお、褒めてよお」

なんか、奈羽が岡本に抱きついて……。

「放せ、恥ずかしい……」

「咲良あ、日和が冷たいよ」

今度は咲良に抱きついて……。

「冷たいねえ、私だけは奈羽ちゃんの味方だよ」

「奈羽、俺の所に来い」



伊吹が両手を広げている……。

「あんたは、もう、それ犯罪……」

あれ？　なんか凄じい楽しそうなんだけど？　俺の時とは随分と違う。

笑い声が絶えない世界。なんだろう……。この寂しさ……。

何か色々と考えてしまう。どうして、俺はこんなに考えてしまうのだろうか？

放課後、行く宛てもなく歩く。

どうして、こんなにも心が折れそうになるの？

さっきまであんなに晴れていた空は、気が付けば曇り、今にも雨が降りそうだ。

俺は公園のベンチに座り空を眺める。

それは、俺が大人ではないから、この空の景色に影響されて、これ程落ち込んでいるだけだろうか？　それとも、本当に落ち込んでいるのかな？

でも、どうして、あの岡本日和はあんなに楽しそうだったの？

あたしと何が違うの？

別の人だから？　あれは別の人なんだよね？

じゃあ、あたしが岡本日和に戻る為には邪魔なんだよね……？

「俺は何を考えている……。勘弁してくれよ……」

よく考えてみて。昨日後を付けていたのは、あたしだったよね？　じゃ、もしかして、あたしを殺すのもあたし？

「嘘だろ……」

だって、お家でお布団の中で殺されたんだよ。どうやって？　家族もいるんだよ？　無理だよ、絶対に見つかるよ。家族か家族と同じ様に家の事なんでも知っていないと。ううん。あたしじゃないと無理だよ。

「もう、止めてくれよ……」

多分、殺して身体乗っ取ったんだよ。あたし超能力者だったよね

？ 知らない能力もあつて別の自分を作り上げるとかも出来たんだよ。だから、今度は今の岡本日和を殺せば、もう一度岡本日和に戻れるんじゃないかな？ 出来るよね？ 全部知っているし。

「頼むよ……。止めてくれよ……。俺は誰なんだよ……。おかしいだろ……。なあ？ 誰か助けてくれよ……」

涙が止まらないよ……。頭の中で勝手にしゃべるなよ……。教えしてくれよ……。俺は木村悠一か？ 岡本日和か？ どっちなんだよ。その時、ふわりと何かが振ってきた。柔らかい何かが……。

どこかを感じた事がある……。そう、これは人だ。

「悠一、大丈夫だよ。心配いらないよ……」  
優しい声。

片平奈羽だ。

俺は奈羽にしがみついて泣いた。声も無く、ただ、泣いた。

「少し長話になるかもしれないけど、我慢して聞いてね」

彼女はゆっくり話した。

「私達五人って凄く仲がいいよね？ 何も言わなくても、お互いの気持ちがわかるくらい仲がいい」

奈羽の身体、凄く温かい……。

「家族みたいな感じで何も言わなくていい。鳥は飛ばなくてもいいのなら飛ばない。疲れるからね。私達も同じ、しゃべる必要がないならしゃべらない」

凄くいい匂いだ。多分、何かの花？

「でもね。それは自分だけ。相手の事を考えていない、自分勝手な行動なんだよ。相手は不安なんだよ、気持ちがわかっていても不安」なんて心地いいんだろう……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すぐくゆつくり。

「ちゃんと思いを伝える事で初めて安心出来るんだよ。気持ちはわかっていても、言葉がないと疑心暗鬼になる。不安が募り、別の思いが生まれ、いつしかそれが真実になる」

凄く耳に心地いい、ゆつくりとしたイントネーション。

「確かにわかっている事を改めて口にするのは無駄だと思うかもしれない。でもね、それは意味を伝える為に言うんじゃないの。安心させる為、信じて貰う為の、大事な人への最低限の義務なんだよ。思いを伝える事を疎かにしないで」

いつの間にか奈羽は俺の顔を両手で優しく包んでいた。

「ごめん。何言っているか、わからないよ……。でも、でも、ありがとう……」

「うん。そうね……。でも、ちゃんと言えたね」

「言うよ、なんでも言うよ……」

「うん。さて、帰りましよう。雨降るから」

そう言つと、まだしがみつく俺を引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し伸べる。

俺は反射的にその手を掴んだ。奈羽は優しく微笑んでくれる。

先程までの岡本の声は消えていた。もう夜と言つてもいい暗さだ。でも、これ程寂しい景色の中でも寂しさは感じられなかった。

女の子と手を繋いで歩く。それは、通常照れなどがあるだろうが、今の俺にはない。

それは、迷子だった子供が母親に出会え、手を引かれている心境だろうか？

ただ、安心できる。

思い出せば、岡本の時もそうだった。奈羽は身体は小さいのに大きい、俺より頭一つ小さいのに、遥かに俺より大きく見える。

ずつとこのまま手を繋いでいたい。しかし家に着いてしまう。

「到着。相変わらず立派なお家だね。雨降るし帰るね。また明日」

「うん、ああ、ありがとう……」

俺は呆然と奈羽を見送る。

しかし、奈羽は本当に何者だろう？ 普通ではないという事は感じる。今、俺の胸にあるのは、ただ、彼女への尊敬と憧れ。女性としてではなく人として。

「そう言えば、岡本語が消えているな……」

だが、岡本日和だった記憶は変わらずある。しかし、俺が木村悠一として、明確に俺は俺としてここにいる。不思議な気持ちだ。

岡本が学校を休んだ。ここは岡本の時とは少し違うが、やはり、昨日同じ事があったのだろうか？ そう、自転車と接触し、肩を怪我した事だ。

冷静に考えると、あれはれっきとした岡本日和だろう。俺と違うのは、ほんの少し素直であった。ほんの少し大人であった。ただ、それだけだろう。それだけの事でこれ程別人に見えてしまう、人間の可能性に驚く。

ならば、今日岡本が殺害される可能性は高い。だが、昨日の考察も説得力があった。「あたしを殺すのもあたし」の事だ。事実、誰がどのようにして？ の問いに対して、明確な答えを提示出来るのは本人である岡本日和だけであろう。動機に関しても昨日の考察「身体を乗っ取る」でクリア出来る。

そんな馬鹿な……。それは、後付けで説明しているだけだ。事象に対して、そうでなければ説明が付かない、と言っているだけで、事実とは限らない。

どうする？ それでもこの考えは払拭できないぞ？ 一昨日の尾行と同じく、何等かの突発的偶然が重なり、岡本を殺害してしまうシナリオの可能性は否定できない。

俺が動く事で岡本が死ぬのか、動かない事で救えるのか？ どっちなんだ？

無為に時間が過ぎ放課後になってしまう。

時間がない。岡本の殺害の正確な時間は不明だが、少なくとも日は暮れていた。

俺は迷いつつも岡本の自宅に足を運ぶ。

裏山に回り監視するか？ 裏山ならば岡本の部屋が見える。

「覗きかよ……」

少し、自嘲してしまう。それでも、岡本日和が心配だった。怯えていた、そう、あの時の岡本日和は怯えていた。どうしようもなく不安だった。それを取り除いてやりたい。そう思う。

陽の明るいうちは人目につかないように奥に行っていよう。

頂上に近い場所に比較的、平坦な広場がある。

子供の頃にみんなで秘密基地を作った場所だ。

「懐かしいな……」

広場には秘密基地の形跡は跡形もなかった。当然だろう。少し、周辺を見て回る。

この先に、縦穴がある。大人の背丈よりも少し深い位だろうか？ 岡本が落ちて大変だった事がある。どうやっても登れずに、俺が下に降りて肩車したんだっけ。でも、それでも登れず、俺も登れず。咲良が手を伸ばしている内に転がり落ちて怪我するわ、大変だった。なぜか、伊吹も穴の中にいるわ……。あれ？ どうやって出たんだ？

「奈羽は何してた？」

いないはずはない、子供の頃は特に俺達は奈羽を中心にしていた。奈羽がいなければ俺達は集まらなかった。

そうだ、奈羽は二ヶ月程、遠方の親戚に預けられていた時期があった。その時か……。じゃあ、なんで俺達は奈羽無しで集まったんだ？ 学校など、その関連以外で俺達是一緒にいる事はなかったよな？ 特に中学に上がるまでは、お互い嫌いあっていた様な気もする……。俺達が喧嘩していると奈羽が泣くから、仲良さそうにしている、気が付いたら本当に好きになっていた……。不思議だ……。思い出せない、保留だ。

既に辺りは暗闇に包まれていた。

俺は岡本の部屋が見渡せる場所まで来る。これ以上は近づけない。万が一にも俺が犯人であつてはいけないからだ。かと言って、ここを離れる事も出来ない。ここが俺の引く、引かないの限界点。不気味な静けさだ……。

遠くでは犬の鳴き声が聞こえる。

そして鈍い音。

……。

鈍い音？ そう言えば、岡本の時に気になっていた音だ。あれは、夢ではなかったのか。

なんだろう？ マットの様な物を叩く音に似ている。

秘密基地があつた広場の方角の様な気もする。

怖いな……。

俺はゆつくりと広場へと歩く。

静かに、いつでも身を護れる様に警戒しながら。

護身用の武器の一つや二つ持つてくるべきだった。

どうして、頭が回らなかったんだ……。

結局、俺は俺を信用していなかった。

自分かもしれないと言う思いが先行しすぎていた。

無意識の内に他の可能性を否定していた。

致命的だ……。

……。

後悔……。

もう何も見えない……。

……。

でも、俺じゃなくてよかった……。

……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1557z/>

---

5番目の蠍

2011年12月5日20時51分発行